

# 30周年に感謝！

## 読者のみなさまの投稿で綴る

# 「ほのぼのマイタウン」のあゆみ

4-5月号で「ほのぼのマイタウンと私」「ほのぼのマイタウンの思い出」等の投稿を募ったところ、大変多くの方々から寄せられ、ありがとうございました。皆さまの投稿をもとにこの30年を振り返ってみました。

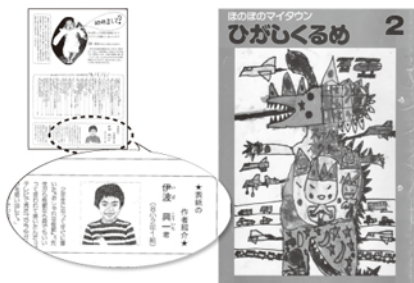


創刊1号

### 創刊のきっかけ

印刷会社国栄（東久留米市）の前社長粕谷さんとは仲良しでした。30年前、他市で発行されているタウン誌を集めて、国栄さんにこのようなタウン誌をわが街でも発行したらどうですかと提案しました。「街は狭いようで広いのですよ。知っているようで知らない所ばかりです。地元の情報を知らせる価値があり、広告もまた地元の情報です」と粕谷さんに発行を決定させました。市民に役立ちました。「ほのぼの情報ネット」のお陰で30年も続きました。まだまだ情報元として必要ですが、残念であります。

磯部芳郎さん（東久留米市）



表紙の作者紹介（写真が小2の伊庭さん）

下）ほのぼの2号を間に小暮さん（右）と伊庭さん



### 初期の頃の広告主

30周年おめでとうございます。ここまで来ると、多くの人の関わりにより続いてきたことに感無量です。国栄の故粕谷製作社長がポケットマネーを出して、情報誌を発行した時から私と「ほのぼのマイタウン」との間わりは始まりました。社長が私にスポンサーの一人になってほしいとのことで広告を出し、私の娘も赤ちゃんの時、誌面を飾らせていただきました。最初は社長とスタッフ一人からスタートし、編集室は社長の貸家だったと記憶しています。今回の休刊は本当に淋しい限りです。将来、ほのぼのマイタウンが再び私たちに届くのを楽しみにしています。

堀 範雄さん（東久留米市）

さて、ほのぼのマイタウン発行当時は東久留米限定の地域誌だったが、近隣5市へと広がりタウン誌として親しまれてきた。いつも楽しみにしているインタビュコーナー、情報ボックスを見ては、学び食べそして遊んだりの情報もたびたび得た。残念なことに休刊とのことだが、ゆっくり休み充電して「復刊」を期待している。私と同じ思いの人も多しことだろう。

小暮康夫さん（東久留米市）

▼この文章を寄せてくださった小暮さんにぜひ会いたいと、ご自宅を訪ねました。30年にわたり大切に保管されてきた創刊2号に感激。最初に電話した時は表紙の作者、伊庭さんの消息はわからないとのことでしたが、その後調べてくださり、伊庭さんの自宅を訪ね、25年ぶりの再会が実現。「当時の面影が残っているから、すぐにわかった」と小暮さん。

それならお二人の写真を撮らせてほしいと、改めて取材を申込みました。伊庭さんは現在37歳。地元で父が経営するリフォーム会社を手伝っている爽やかな独身男性です。「表紙の絵のことはちょっとも憶えていないんですよ。母はうっす



100号記念の表紙絵展がスタート

らと憶えていたようで、久しぶりに母と思い出話できました」とにっこり。幼稚園の頃は絵の教室に通っていたとか。小暮さんは伊庭さんの1、2年の時の担任。「とても明るくひょうきんな子」だったそうです。当時、小暮先生は35歳。今の伊庭さんと同じ位の年齢でした。学校のサッカークラブの指導も担当し、「いつも走っていた先生を思い出します」伊庭さんも先生の下でサッカーをやっていたこと。遅刻してげんこつをくらったこと。単学級で家庭的だった当時の八小の思い出話は尽きることなく、体温まるものでした。会はほっこり、心温まるものでした。

▼「小学生が描く、生命力あふれる表紙絵のファン」という読者が多く、平成15年、創刊100号を迎えた時、「100人・100枚の表紙絵展」を東久留米、清瀬、小平で巡回展として開催。1000

▼「ほのぼのマイタウン」は昭和61年6月創刊。8号までは東久留米のみをエリアとして発行していましたが、9号から近隣市にエリアを広げ、その時から編集スタッフの一人として参加したのが現発行人です。100号（平成15年2月3月号）まで国栄の傘下のもとで発行し、101号から独立し、現在の小平市に編集室を移しました。投稿がきっかけで、教え子と25年ぶりの再会。手元に昭和61年7月15日発行の「ほのぼのマイタウンひがしくるめ」2号がある。本棚にいつもあった。「思い出」への投稿を機に読み返してみた。懐かしい。表紙の絵がところどころ薄れ30年の年月を実感する。この号の表紙を描いたのが当時東久留米八小2年の伊庭興一君。当時私は興一君の担任だった。ということは興一君は現在40歳に近い年になる。絵は、ゴジラやガメラを思い出しながら描いた色も鮮やかなすてきな作品。その八小は平成22年3月で廃校となつてしまった。跡地は都立六仙公園として整備され、一面に校歌の碑が建っている。

号ではそれまでの作者のその後を追った特集を企画。抽象画家になった人、テレビアニメのスタッフなど絵の才能を活かした道に進んだ人もいました。

▼「もう独立できるのだから」と幾度となく発行人の粕谷社長から促され、100号を機に国栄から離れました。社長自身が入退院を繰り返した。社長交代の時期でもありました。大海に小舟で一人こぎ出したような、よるべき船出でしたが、とりあえず編集室を自宅に移し、101号からかなねばなりません。

収入は広告代のみ。そのうちの3分の2は制作、印刷、製本代にかり、残りの3分の1で配本代金や手数料、経費等を賄わなければなりません。隔月発行で事務所を借りるなんて夢のまた夢。赤字を出さずにいかに続けていくか、せいつばい。奇跡のごとく続いたのは、長きにわたる広告主の皆さまの支えのおかげです。その多くが10年は言うに及ばず、28年間もおつきあいをいただき、改めて感謝の気持ちで溢れます。

▼創刊20周年の節目に、団塊世代の定年後に地元で役立つ本を



180号(30周年)



勝海舟の曾孫は東久留米にいらした。H 27年 2-3月号



坂本龍馬の坂本家九代目は小平にいらした。H 22年 8-9月号



20周年記念誌 (H 18年 6月発行)

作ろうと、スタッフ総動員して1年がかりで『定年後をこの街で10倍楽しく暮らす法』を出版。執筆、広告掲載、地域の人々の絶大な協力をいただき、数多くのメディアにも取り上げられました。出版記念の20周年交流会を催し、さまざまな分野の方々150人近く集って下さいました。この会をきっかけに新たな交流が生まれたケースもありました。

### 長年の読者です。

ケータイもメールもネットもやってなかった頃、近くのお店で偶然見かけた「ほのぼのマイタウン」。生活圏の身近な情報、活きた細かい記事が満載で、子育て奮闘中の私ほどれだけ救われたことか。記事を頼りに我が家の生活が楽しく豊かになり、本当に感謝しています。お蔭でお出かけしたり、おいしい思い出、お得意な思い出がたくさんできました。

いまは親の介護で悪戦苦闘していますが、また元気をもらえるように、貴誌に会えることを楽しみに、明るくほのぼのと過ごしたいと思えます。今までありがとうございます！

松尾早智子さん(小平市)

えて出かける。こんなゆつたりとした時間がとても嬉しいです。休刊はとてもしんじりますが、手元にあるタウン誌を大切に、今後も活用させていただきます。

北原珠江さん(東久留米市)

毎号、タイムリーな幅広い話題や、地域で様々な活動をされている方々の充実したコラムがあり、私は「ほのぼのマイタウン」を通して人と出会い、場所と出会い、地域の歴史と出会うことができました。「ほのぼのマイタウン」なしでは出会うことがなかったものが幾つも思い浮かびます。特に印象深いのは田無神社の特別拝殿で、記事に加えて実際に訪れて見ることで、私の地域観が少し変わったように思います。

これからもそんな出会いが続くと思っていたので次号で休刊と知り、まさに青天の霹靂、本当に残念です。いつも「休息」ということで、またいつか「ほのぼのマイタウン」が地域との縁を結んでくれたらいいなと思っています。

渡辺久美子さん(西東京市)

### 地域をつなぐ媒体として

私が小平にて英会話教室の事業を



20周年交流会の取材を受けたスタッフ一同 (H18年6月)

22年前に東村山に引っ越してきて、郵便局か図書館でいつも「ほのぼのマイタウン」をみつけてはいただきてきました。地域の小学生の表紙絵をすばらしいナとも感心していました。広告を参考にしたり、オススメ情報もいつもチェックしていました。

「せえさんちでティタイム」のコラムを読んでジンとしたこともありました。本当にいいタウン誌でしたので残念です。涙、涙です。

P Nつぐみさん(東村山市)

▼エッセイやコラム、小咄の執筆の方々が13年余出稿してくださり、頭が下がります。それぞれのページにファンがいました。取材した方々もこれまで何百人、いえ千人



30年間、180冊 読者からのハガキは編集室の財産

引き継いで、凡そ3年に1冊、地域のことを何も知らず、広告をどうすべいか思索していた時、書店のレジ脇で見つけたのが「ほのぼのマイタウン」でした。偶然にも、講師の一人が所属するコミュニティと松永さんが懇意にされていることを知り、その後、その講師とも仲良くして頂き、また、コミュニティについて相談のことも頂くなど、本当にお世話になりました。

東京都下のような郊外地域には、「ほのぼのマイタウン」のようなコミュニティを繋ぐメディアは欠かせません。今後もネット上での発信を続けられるそう、心強い限りです。私も、小平で何かしらのコミュニティを築きあげられるよう頑張りたいと思います。

高野義之さん(小平市)

以上になるかもしれませんが、未知の方に会うワクワク感は何事にも替えがたいものでした。

エリア内だけではなく、取材がきっかけで、海外へも出かけました。オーストラリアのカウラという日本人墓地がある街に、小学5年の息子を連れて二人旅。「オーストラリア子連れ旅行」と題して、2回にわたり掲載。ママさんたちに支持されました。定年世代のロングステイ地マレーシアのキャメロンハイランド、ボルネオ島のタンブナンという田舎を訪ね、貴重な体験をレポートしたことも懐かしい思い出です。

### 出合いにありがとう

人生出合いが大切と……深く実感したのがこのタウン誌との出合いでした。5年前程、「トイカフェ」の記事の中で、オーナーの娘さんが二胡を弾かれるとのことで、強引に生徒第一号にさせていただきました。この出合いが私のシニア世代突入へのターニングポイントになりました。私の娘が学生の頃は2冊いっただき娘と私で手元に、娘が結婚して練馬に住むようになって愛読してあります。手に取り、ページをめくり、何度も読み返し、時にはタウン誌を携

只今は5月10日ということで、原稿締切日に今号を入手。サナクンでなくとも「ギョギョギョ」な休刊の報、多摩六都科学館運営圏の地域誌が無くなるのは残念。この地域はあらゆる媒体からスルーされてしまっているので、地元の話ほど知らない現実があったのですが、店だけではなく企業に関しても本誌で初めて知った所の数々を思うと、何ともつたいないなど。たまたま知る機会というのは、ネットより紙媒体の方が多いので、その点でも残念でなりません。

中田英樹さん(西東京市)

▼制作が電算化したこと以外は30年間変わることなく、子どもの絵を表紙にし、手配りでスポンサー店や公共施設に届けました。時間と労力をかけ、多くの人の手を経て出来るが紙媒体、それに出会い、ドラマが始まる人もいます。皆さまからの投稿を読み、改めて紙媒体の役割を思い知らされました。30年間、本当に、本当にありがとうございました！

(掲載できなかった多くの投稿があり、申し訳ありません。また掲載文も誌面の都合で一部を省略させていただきます)